監修　新村出　高木市之助　久松潛一
山岸徳平　小島吉雄

# 吉利支丹文學集

上

新村出
柊源一　校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

監修　新村出　高木市之助　久松潛一
山岸徳平　小島吉雄

# 吉利支丹文學集

上

新村出
柊源一　校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

新村　出（しんむらいづる）
明治九年山口縣生。明治三十二年東京大學言語學科卒業。京都大學名譽教授、日本學士院會員。昭和三十一年文化勲章。主著―東方言語史叢考、新村出選集、広辞苑、言林苑、言林等。

柊　源一（ひらぎげんいち）
明治四十二年京都府生。昭和十五年京都大學國語學國文學科選科出身。上智大學教授。主著―文祿二年耶蘇會板伊曾保物語（飜字・解題）、日本古典全書・吉利支丹文學集（上・下）等。

日本古典全書
「吉利支丹文學集」上　新村　出　柊　源一　校註
昭和三十二年十一月三十日初版發行
昭和四十一年四月三十日第三刷發行
印刷所　圖書印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・北九州市小倉區砂津・名古屋市中區廣小路）
定價　五〇〇圓

# 目次

解説……三
一、吉利支丹文學の思想的背景……三
——キリスト教の成立から日本渡來まで——
二、吉利支丹文學成立の地盤……三四
——吉利支丹布教史をたどりつゝ——
Ⅰ キリスト教の傳播及び興隆の時代……三七
1 聖フランシスコ・サヴィエルの來朝……三七
2 九州及び山口における布教のはじめ……四三
3 京都地方への進出……四五
4 九州における教勢の伸長と上方における最初の追放令……四九
5 長崎・天草の開拓……五四
6 信長の入京とその保護による宗門の發展……五六
7 ヴァリニアノの來朝と活動……六一
8 少年使節のヨーロッパ派遣……六四
Ⅱ 最初の禁制と雌伏の時代……六七
1 秀吉の追放令發布……六七
2 少年使節等の歸國と印刷機の輸入……七〇
3 フランシスコ會の活動と日本最初の殉教者……七三

Ⅲ　德川初期における中興發展の時代……七四
1　家康の宗教政策の變遷……七四
2　伊達政宗の遣歐使節……七六
Ⅳ　德川幕府の迫害と宗門潛伏の時代……七七
1　迫害から鎖國への道程……七七
2　島原の亂から鎖國へ……七八
3　吉利支丹宗門の潛伏とその復活……八一
三、吉利支丹文學……八四
Ⅰ　吉利支丹文學の意味……八四
Ⅱ　吉利支丹宗教文學……九二
〔イ〕新編宗教文學……九二
1　ドチリナ・キリシタン……九二
2　ばうちずもの授けやう……九三
3　サルヴァトル・ムンヂ……九五
4　妙貞問答……九六
〔ロ〕邦譯宗教文學……九八
1　サントスの御作業の內拔書……九八
2　ヒデスの導師（信心錄）……一〇〇
3　コンテムツス・ムンヂ……一〇一
4　ぎやどぺかどる……一〇三
5　おらしよの飜譯……一〇五
6　スピリツアル修行……一〇八
7　ひですの經……一一一
〔ハ〕ラテン文學……一一二
1　イグナチウス・デ・ロヨラ著心靈修行……一一三
2　バルトロメウ著　精神生活綱要……一一四
3　サカラメンタ提要……一一五
4　アフォリスミ・コンフェッサリオルム……一一六
5　聖教精華……一一七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Ⅲ 教外文學……一二八
〔イ〕西洋古典文學……一二八
1 吉利支丹版に現れた古典の拔萃……一二八
2 伊曾保物語……一二九
〔ロ〕和漢古典文學……一三〇
1 平家物語……一三〇
2 金句集……一三三
3 倭漢朗詠集卷之上……一三五
4 太平記拔書……一三七
Ⅳ 古逸吉利支丹文學……一三八
Ⅴ 吉利支丹語學書……一三三
〔イ〕文　典……一三三
1 アルヴァレス編ラテン文典……一三三
2 ロドリゲス編日本大文典……一三四
〔ロ〕辭　書……一三六
1 羅葡日對譯辭書……一三六
2 落葉集……一三七
3 日葡辭書……一四〇
Ⅵ ドミニコ會關係刊行書……一四二
1 ロザリヨ記錄（一六二二年版）……一四二
2 ロザリヨの經（一六二三年版）……一四三
3 コリヤド編日本語文典……一四四
4 コリヤド編懺悔錄……一四五
5 コリヤド編羅西日辭書……一四七
Ⅶ 吉利支丹文學研究のあと……一四九
四、こんてむつすむん地……一七一
凡　例……一八五

こんてむつすむん地……一八九

目　錄……一九一

卷第一……一九九

第一　世界のみもなき事をいとひ𝒟𝒶𝒱𝒾𝒹をまなひ奉る事……一九九
第二　𝒟𝒶𝒱𝒾𝒹をおそれ奉らぬ人のがくもんの實もなき事并にとくふかき眞のがくもんは何れぞといふ事……二〇一
第三　眞實のをしへの事……二〇三
第四　よろづの事にけんりよをくはふべき事……二〇八
第五　たつときやうもんをよむ事……二〇九
第六　みだりなるのぞみの事……二一〇
第七　むやくのたのもしき心とけうまんをのぞくべき事……二一一
第八　みだりに人にしたしむ事をのぞくべき事……二一三
第九　ことばをすごすまじき事……二一四
第十　ぶじをもとむべき事ならびに善のみちにさきへゆくなげきの事……二一五
第十一　きにさかふなんぎをこらゆるにとくふかき事……二一八
第十二　てんたさんをふせぐ事……二一九
第十三　じやすいをのぞくべき事……二二四
第十四　かりだあでといへる𝒟𝒶𝒱𝒾𝒹の御大切にひかれていたすしよさの事……二二五
第十五　人のあやまりをかんにんすべき事……二二七
第十六　いにしへの善人のかゞみの事……二二九
第十七　よききりしたんのをこなひの事……二二三
第十八　かんきよもくざをこのむべき事……二二六
第十九　身をかへりみるこゝろのかなしひの事……二二一

第二十　にんげんのはかなき事をしあんする事……二四四
第廿一　しするのくはんねんの事……二四八
第廿二　じゆいぞとて御きうめいととがにあたるくるしみの事……二五三
第廿三　ぎやうぎをなをさんともえたつ心の事……二五八

## 巻第二……二六五

第一　心中にほとむつましくさんくはいし奉る事……二六五
第二　へりくだりをもてかんにんすべき事……二七〇
第三　ぶじなるよき人の事……二七二
第四　しやうぶなる心とひとへなる心あての事……二七四
第五　身のうへをしあんしたにんの上をたゞすまじき事……二七六
第六　きよき心のよろこびの事……二七八
第七　ばんじにこえて仏を思ひ奉る大切の事……二八〇
第八　ほあたへたまふがらさの御をんにたいする御れいの事……二八二
第九　たつとき御くるすのごかうのみちの事……二八六

## 巻第三……二九六

第一　ふたごゝろなきあにまにたいせられ仏の御かんだんの事……二九六
第二　ほの御ことばをへりくだる心をもてちやうもんしもちひたもつべき事……二九七
第三　しんぶつのがらさをこひ奉るおらしよの事……三〇〇
第四　ほとともにしんじつとへりくだりをもてよろづをとりあつかひ奉るべき事……三〇二

第五　しんじつの大切のせうこの事……三〇五
第六　心ののぞみをきうめいしてよくおさむべき事……三〇九
第七　かんにんの事ならびにしきたいののぞみにたいしてたゝかふ事……三一〇
第八　のぞむほどの事についてぱへ何と申あぐべきぞといふ事……三一二
第九　まことのくつろぎをばぱ御一たいにのみたづね奉るべき事……三一五
第十　わがしんだいをまつたく御あるじぱ御一たいにのみまかせ奉るべき事……三一七
第十一　ゑの御かゞみをむねとしてげんざいのなんぎはかなき事をひとしき心をもてうくべき事……三一九
第十二　ちじよくをこらゆる事つけたりまことのかんにんある人のしるしの事……三二
第十三　わがよはき事とげんざいのはかなき事をさんげする事……三二五
第十四　かずかぎりなきぱの御をんを思ひいだしたてまつるべき事……三二八
第十五　たにんのぎやうぎをみだりにたづねさぐるべからざる事……三三一
第十六　心のたしかなるぶじと善のみちにさきへゆく事はなにゝきはまるぞといふ事……三三三
第十七　わが身を大切におもひすごす事はをはりなきたのしみのさまたげとなる事……三三五
第十八　人のひはうにたいすることはりの事……三三七
第十九　なんぎにあふときなにとやうにぱをたのみあがめ奉るべきぞといふ事……三三八
第二十　此せかいにてあやうからずしてたつしたるくつろぎなしといふ事……三四〇
第廿一　人よりじやすいせらるゝ時なす

べき心得の事……三四三
第廿二 いづれのしよさについてもとくしんをみだすほどはすまじき事……三四五
第廿三 げんざいのほまれをいやしむべき事……三四六
第廿四 ほかの事にあまりこゝろをうつさずないしんをほんとすべき事……三四七
第廿五 心のじゆうをえぜんだうに入べきためたつして身をいとふべき事……三四八
第廿六 人ごとにことばはしりやすき物なればたやすくしんずまじき事……三五〇
第廿七 人よりちじよくひはうをいひかくるときにたのみをかけたてまつるべき事……三五三
第廿八 をはりなきいのちのためには何たるかたき事をもこらゆべき事……三五七
第廿九 天上のたのしみとげんざいのはかなき事をくはんずる事……三六〇
第三十 をはりなきいのちをのぞむべき事つけたり善のみちにかつせんするともがらにやくそくしたまふ御へんぼうの事……三六四
第卅一 ちじよくとなんぎにあふ時へりくだるこゝろをもてかんにんすべき事……三六八

## 巻第四……三七一

第一 たつとき為うかりすちやをうけ奉るにはいかほどのうやまひ入べきぞといふ事……三七一
第二 為うかりすちやのはかりなくたつとくまします事ならびにさせるだうてのくらゐの事……三七九

第三　こんしえんしやをきうめいしし
んだいをあらためんとおもひ
さだむる事……三八〇
第四　ゑうかりすちやをうけ奉るため
にせいをつくして其かくごを
なすべき事……三八三
第五　ひいですをふまへとしてたつと
きゑうかりすちやを申うけた
てまつりじたのうへにとがの
御ゆるしをこひたてまつるべ
き事……三八六
本語對照表……三九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 吉利支丹文學集

上

新村出
柊源一

# 解　説

## 一、吉利支丹文學の思想的背景

――キリスト教の成立から日本渡來まで――

キリスト紀元一五四九年、即ち我が天文十八年、東洋の大使徒と稱へられる聖フランシスコ・サヴィエルは、當時世界の學問の中心たるパリにおいてかち得た學者としての名聲と、彼が希望しさへすれば實現されるべき教會の高位への昇進の道を捨てて、眞の神を知らぬ東方民族の救靈に悲願をかけ、あらゆる困難と苦痛を忍び、インド、マラッカを經て、極東の島國日本の南端鹿兒島に上陸したのであつた。その後十七世紀前半までの約百年間、聖フランシスコの遺業を嗣いだイエズス會員を中心とするカトリック諸修道會の外人宣教師と、彼等に協力した日本人聖職者及び信者の努力により、吉利支丹の布教が活潑に行はれると共に、いはゆる吉利支丹文學が生れ、發展し、傳へられた。秀吉及びその方針を受けついだ德川幕府

の吉利支丹禁制と、更にはこれを強化するための鎖國により、吉利支丹文學は直接その後の日本文學に大きな影響を與へることはなかつたけれども、それは日本文學史上に開いた西ヨーロッパ文化の華であり、日本精神史に大きな足跡を殘し、やがては明治以後の近代文學にも影響をおよぼした。その關係するところは後述の如く廣大であるが、木下杢太郎、芥川龍之介の如きは狹い意味でその影響を受けた文學者の最たるものであり、近くは長與善郎、井伏鱒二、大佛次郎にも、吉利支丹に材料をとつたすぐれた作品がある。

せまい文學の定義の上からだけ言へば、吉利支丹文學は、日本文學史上に大きな位置を占めるとは言へないかも知れない。しかし、もつと廣い精神的な面からみれば、それは日本の文化史の中に大きな地位を與へられるべきものである。吉利支丹の宣教師は宗門と共に西ヨーロッパの新しい文化をもたらした。十七、十八世紀におけるシナの天主教會――カトリック教會はシナではかう呼ばれた――の刊行した、『西學凡』、『幾何原本』、『坤輿圖說』の如き自然科學に屬するものは、日本では各地の學林では教へられたが、出版はせられなかつた。しかしこれらを生んだ近世的精神は、吉利支丹文學の中に傳へられてゐる。この精神こそヨーロッパの文化を生んだものであり、現代の世界を支配してゐるものである。これが宗門の禁制と鎖國によつて、明治の初めに至るまで、日本に入る道をふさがれてしまつた。維新以來の單なる物質文明の輸入だけでは、この缺陷は補へるものではない。あらゆる面に科學的精神の缺けてゐること、これは鎖國のもたらしたものであり、日本の破滅の原因となつた。

近代の學問・思想はすべてヨーロッパの中世に端を發することは、中世研究の進むにつれてますます明かになつてきた。そのもつともすぐれたものが、吉利支丹文學の中に流れこんでゐる。それは理性を重んじ、物事を合理的に考へてゆく精神である。あの時代、吉利支丹の宗門が、日本の人口二千萬に對し、七十萬と稱せられる信徒を擁するほど榮えたのは、何故であらうか。戰國亂世の間、新興の勢力が勃興して舊來の傳統は權威を失つた。精神的にも民衆は在來の諸宗派に信賴を失ひ、新しい心の據りどころを求めてゐた。たまたま渡來したキリスト教は、神から與へられた啓示をその信仰の基礎とはするが、教義を說くにあたつては、できるだけ人間の理性に訴へて、その議論を進めて行つた。日本人は感情的で理性を重んじないと言はれるが、人間が知・行を通じて合理的なものを求めるのは、その本性に屬することである。今までの日本に缺けてゐたもの、それを求めてキリスト教に魅力を覺えたのは當然なことと言へよう。キリスト教の根本的な精神、人は神の前においてはすべて平等であるといふ思想、また教會がそれを具體的に實行して、教會內では武士と庶民とが同列に並び、弱きもの、病めるもの、飢えるものを救つたことも、たまたま時代的に人間解放を求めてゐた庶民をひきつける大きな原因となつたであらう。後にも述べるが、キリスト教は成立以來その發展につれて、教義を說明し、體系づけるためにギリシァの學問をとり入れることが多かつたが、これもキリスト教を通じて、わが國に入つて來た。卽ち、吉利支丹文學は西洋古典文學乃至は哲學をもとり入れてゐる。西方の文化と、極東の文化とが初めて接觸し、交涉したのは日本にお

いてである。從つて、吉利支丹文學には東西文化の交渉の面からみても意義深いものがある。

イルマン・ハビアン著の『妙貞問答』（一六〇五年、慶長十年）の如きはこの點から非常に興味がある。吉利支丹文學は今まで書誌學的研究、また國語學的研究については多くのすぐれた業績が見られたが、右に述べたやうな意味での吉利支丹文學に對する研究は未だ十分な成果をあげてゐるとは言ひがたい。それについては考へるべきことが多いが、その一つとして吉利支丹文學を生むに至つた背景を一通り理解することが必要である。キリスト教は成長發展するにつれて、ギリシァ、ローマを初め、その他の異種の文化を抱擁して、今日のヨーロッパ文化を形成するのに大きな貢献をした。その宗教や學問藝術が日本に渡來して吉利支丹文化を生んだ。その由來や環境を一通り理解することは、吉利支丹文學を研究するための大前提として、必要缺くべからざることである。日本渡來までのキリスト教の思想と日本における傳道の歴史とのうち、吉利支丹文學に關係の深い事柄に重點をおいて、吉利支丹文學の思想的背景、その成立の地盤と題して、以下に略述することとする。

「活きをれりとパウロが斷言せる一人の死者イエズスに關してユデア人の間に爭論起れり。」紀元六〇年頃、ユデアに駐在したローマの官吏ポルシゥス・フェストゥスはこのやうにキリスト教を觀察した。キリスト教の本質については種々の解釋があるが、右の短かい句は學者の様々の議論よりも、はるかにその本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.